

# 学校ファームの栽培計画

学校ファームの栽培体験によって得られるものは単なる技術だけではない。栽培していく過程で、自主性や計画性が身に付き、仲間とともに考え行動していくなかで協調性も生まれてくる。

また、植物と植物、植物と微生物、植物と動物、植物と自然など、自然界の営みも見えてくるように

なる。そしてさらに、植物を育てることにより、植物と人間生活とのかかわり、地域の産業などを知ることにもつながってくる。

さらに、この体験が単なる体験に終わらず、食の安全性や食糧危機、環境問題などを考えるきっかけになることを期待したい。

## 1. 栽培する種類の選択

学校は、春休みや夏休み、冬休みなどの長期休業期間があるので、できればその期間にかからないように栽培したほうが体験を生かしきれぬ。しかし、種類によっては、どうしても長期休業期間にかかってしまう。

そんなときには、購入苗からスタートするとよい。とくに、トマトやナス、キュウリなど寒い時期に種をまく果菜類は、加温設備や経験がないと育苗が難しい。よい苗を用いることによって、正しい比較試験や実験・観察が可能になる。

次に、その野菜または作物を栽培することによってどんなことを学ばせたいのかを考えておく必要がある。

栽培する野菜の種類は、畑の面積、場所、栽培時期・期間、食べ方などとともに、予算や栽培指導が可能かどうかなども考慮して選ぶようにする。そして、そのリストから生徒に選ばせて栽培する種類を決めたほうが指導がスムーズに行く。

自主性をもたせるという意味では、生徒に種類を決めさせるのもよいかもしれない。しかし、子どもたちの希望はイチゴやスイカなど果物的な野菜に偏りがちになる。希望をとってから、それはだめ、あれはだめでは生徒のやる気をそいでしまい逆効果になるので注意しよう。

## 2. 栽培面積または本数

みんなで食べるのを楽しみに栽培したのに、少ししかとれなくて全員の口に入らなかった……。こんな結果になっては惨めだ。どのくらいの面積または本数を作ったらよいかは、10 a 当たりの収量を調べればわかる。

1m<sup>2</sup>が10 a の1 / 1,000 の広さ (10 a が1,000m<sup>2</sup>) だから、簡単に計算もできる。といっても、プロの農家とちがって、なかなか計算どおりにはいかないもの。

たとえば、大玉トマト苗を5月に植えた場合を考えてみよう。

トマトの花は本葉3枚ごとにつく。そして、1花房に4～5個の実がつく。だから、栽培がうまくいけば1本で20個の実がとれる計算になる。トマトは、6月ころから花が早く咲いた順に赤くなるから、20個がいつに赤くなることはない。そのため、1クラス30人として、全員がいちどに食べるには、少なくとも10本以上苗を植える必要がある。

そんな理由から、トマトを作るならば大玉トマトよりも、1花房にたくさん実がつくミニトマトかミディトマト (中玉) が適当だろう。大玉トマトは、病気に弱いが、ミニやミディは比較的強いので初心者でも作りやすい。どうしても大玉が作りたいという子どもがいたら、比較実験として何本か栽培しておくにとどめてはどうだろう。

ナスの場合は、1人当たり1本あれば、夏の間じゅう食べられるだけ収穫できると昔からいわれている。トマトなどと

違ってたくさん食べるわけではないので、5本もあればじゅうぶんだろう。

イチゴは、最低でも1本から10～20個くらいは収穫できる。ただし、トマトと同じでいちどには赤くならない。1本でいちどに2～3個とれたとして、1クラス当たり20本程度は欲しい。

こうして、種類ごとにおおよその収量ととれる時期を調べておくと、収穫するときになってからあわてることもなく安心だ。

子どもたちにとって、長期間の観察と栽培管理によってできた生産物を食べるのは、最高の喜びと思い出になるに違いない。そのためにも、指導者は綿密な栽培計画をたてておくことが必要になる。

栽培計画 (例)

